創世ホール通信No. 294

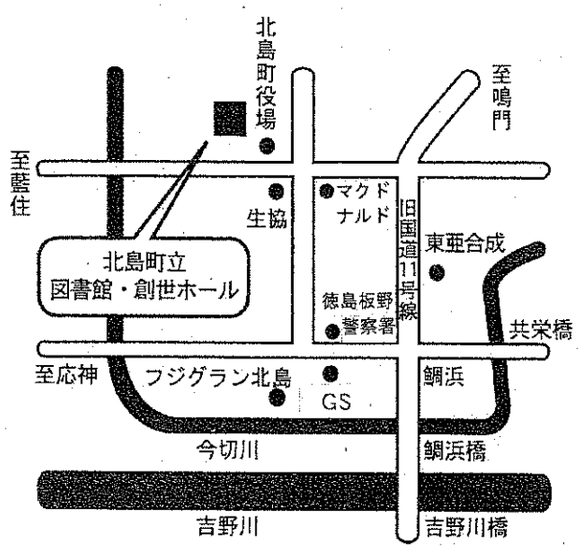
催し案内＋文化ジャーナル
2019年7月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

徳島クリエーターズマーケット

7月6日(土)・7日(日)
午前10時～午後5時（最終日は午後4時まで）

会場：2階　ギャラリースペース　入場無料
主催：徳島クリエーターズマーケット事務局
（代表：川久保☎080-3162-2234）

■全国津々浦々から凄腕の「モノづくり人」が集う、徳島県内最大級のハンドメイドマーケット、令和に改元してから初の開催になります。■発起人は川久保貴美子さん。脱力系癒しキャラ「ししゃもねこ」で知られる、本町在住の造形作家さんです。■自分だけのオリジナルハンドメイドグッズが作れる体験型ワークショップも充実！お気に入りの一品が見つかるかも！皆様、ぜひご注目ください。



第29回北島町平和のつどい

7月27日(土)
① 午前10時　② 午後2時

会場：3階　多目的ホール　入場無料
上映作品：「二十四の瞳」（原作：壺井栄）
上映時間約71分
共催：北島町・北島町平和のつどい実行委員会
（代表：髙橋☎088-698-4119）

■美しくのどかな自然に囲まれた小豆島と、戦争と軍国主義に傾きつつある時代を背景に、岬の分教場に赴任してきた大石先生と12人の教え子たちの心温まる交流を描いた日本文学史上の名作「二十四の瞳」を上映します。
同日開催：広島・長崎原爆/徳島大空しゅう写真展　2階ギャラリースペース

四国大学発★ブックトークおはなし会「読書感想文、どの本を読む?」

7月27日(土)
午後2時～午後3時

会場：2階　ハイビジョンシアター
対象：小学校1・2年生とその保護者

■四国大学の学生さんが、読書感想文におすすめの本のお話をします。課題図書は難しそう…好きな本で書きたい…そんなあなたにぴったりの本が見つかるかも！？

あかちゃんとお母さんのためのビデオ上映会

8月8日(木)
午前11時～(開場10時30分)

会場：2階　ハイビジョンシアター
上映作品：「ミッフィーとどうぶつえん」
上映時間約35分
主催：北島町教育委員会(☎088-698-9812)

江富久雄子ども写真展

8月23日(金)～25日(日)

会場：2階　ギャラリースペース　入場無料
主催：江富写真館(☎088-698-6888)

速報★開催決定！北島トラディショナル・ナイト

10月31日(木)

会場：3階　多目的ホール

■毎年ご好評いただいております北島トラディショナル・ナイト、今年も開催決定！芸術の秋の夕べは、遙かなるケルトの調べに耳を傾けてみませんか?■出演者、演奏曲、チケット情報などの詳細は次号以降にお伝えします。ご期待ください！

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

だれが明朝体を作ったのか
～その誕生と歴史①

書体設計家、活字書体史研究家★小宮山博史

●●今号から、《創世ホール・アーカイヴズ》の一環として，2019年３月16日に北島町立図書館・創世ホール３階多目的ホールで開催した小宮山博史先生講演会「だれが明朝体を作ったのか～その誕生と歴史」の採録を連載します●講演会には横浜の博物館学芸員、京都の書体メーカーのフォント課長、東京の研究家、神戸の創世ホール講演会ファン、県内唯一の活版印刷所関係者、グラフィック・デザイナー、新聞記者、放送局職員など県内外から約150人が集まりました●語り口はあくまで平易ですが内容は学術研究的要素満載の緻密で高度なものでした●この種の催しは各都道府県で開催されてもおかしくないと思います。文化行政の現状に一石を投じる意味からも、この講演採録を掲載する次第です●特に首都圏の各図書館や公立ホールは、なぜこの種の催しをやろうとしないのか●書物の根幹をなす活字の研究なのだから、各地の図書館大会や、読書振興大会などいくらでも開催できるはずです。断固たる確信をもってこの問題提起を行ない、連載冒頭のメッセージといたします。（北島町立図書館等協議会委員長、講演会企画広報担当者＝小西昌幸）●●

講演■今、ご紹介にあずかりました小宮山でございます。この330席の会場で、10人ぐらいしか来なかったらどうしようと思って、案外気が強いんですが、昨夜はあまり眠れませんでした。さっき、緞帳が上がったときに、客席が10人じゃなくて、よかった、これなら安心して何かしゃべれるかなという風に思いました。

■今日は、ご紹介にありましたように明朝体の歴史についてお話をしようと思います。僕たちが使っている書体の殆どが明朝体というものなんですけど、この明朝体という書体はいったい誰が作ったのかということが知りたかった。

■僕はご紹介がありましたけど、今まで明朝体を作る仕事が多かったということにもよりますが、明朝体は誰が作ったのかなということがすごい疑問でした。今日はその報告ということでお聞きいただければと思います。難しいことは言わずに簡単なことを少しずつお話ししたいなと思います。

■1990年ぐらいまでは、明朝体という言葉を知っているのは印刷関係者とデザイナーと出版社、大体この３業種ぐらいでしたけど、今は、若い世代でも明朝体という言葉はよく知っている。だけれども、その明朝体はいったい誰が作ったのかということにはあんまり興味深く探されてはいない、という風に僕は感じています。

■（舞台奥の演題たらしを指しながら）ここに「だれが明朝体を作ったのか」と書いてあります。横線が細く、縦線が太い、楷書体の変形―変形と言っちゃいけないな―定型化された書体なんですけど、いったい誰が作ったのか。日本では「明朝体」は、明の時代にできたデザイン様式という風に解釈されていると思います。中国ではこれを「明朝体」と言わず、宋の時代の「宋体」と言っています。ですから少し解釈の仕方が違うと思います。今日は、この「明朝体」がいつできて、どんな風になってきたのかということについて、1805年から67年間の歴史の中で見ていきたい。67年間つまり、明治５年を区切りとしてお話をしたいなと考えています。

■今日お配りをした資料の中に、Ａ４のコピーが１枚入っています。それと、資料を開けていただくと、上の方に話に出てくるであろう用語、その下に投影する図版のキャプションが入っています。これをご覧になりながら、話をお聴きいただければよろしいかなと思います。

■それでは始めさせていただきます。先程、1805年と申し上げましたが、正確には1804年の話になります。ナポレオンが皇帝になる。そして戴冠式〔たいかんしき〕が1804年に行なわれます。その時にローマ法王のピウス７世を招待します。本来ならナポレオンの頭に冠をかぶせるのはピウス７世のはずなんですけど、ピウス７世はただの招待者として呼ばれている。これはどういう意味なのか。はっきりとは分からないのですが、もしかすると「世界は君のもとにあるのではなくて、自分―つまりナポレオン―が世界を支配しているのだ。君ではないぞ」というようなメッセージが、あるのかも知れません。

■その時に、ピウス７世に対して『オラティオ・ドミニカ（主の祈り）』、博言集〔はくげんしゅう〕というのかな、これがそうなんです。

■「主の祈り」を150の言語で印刷した本（見本）なんですね。これをピウス７世に献呈する。本の最初にピウス７世への献呈の言葉が書いてある。これが多分一番最初にできた、近代印刷術にのる明朝体でしょう。

■これは40ポイントという大きさですから、大体16ミリ正方の活字です。これは金属ではなくて、木に彫った活字。彫ったのは帝立印刷所の彫師ドラフォンという人です。版下は中国人が書いたのか、あるいはフランス人が書いたのか。その辺がまだ分からない。

■この本は案外珍しくてなかなか手に入らないんですけど、先程ローマ法王に献呈する本だと申しました。ナポレオンの栄光を称えられるわけですから、変なところがあっちゃいけないわけですよね。ちょっとこの「國」という部分を拡大してみてください。変ですよねー。「國」の字が、ひっくり返っているでしょう。

■ナポレオンが自分の栄光を称えるのに、自分の「國」の字がひっくり返っている。なんか変な話なんですけど。印刷博物館にある同じ本は、「國」がちゃんと正立している。それから多分アメリカにあるものは２字目の「天」という字が欠けている。誤植だらけの本。この原型は、1700年代の中頃に（文字数はそんなに多くはないんですが）作られています。これが僕が考えている一番最初の明朝体活字を使った本。これは木に彫った活字ですので全体には生ぬるい気もします。

■はい、次の映像をお願いします。今はもうありませんけども、フランスの国立印刷局に保管されていた40ポイント木活字の明朝体。見てお分かりのとおり、正確に40ポイントではない。大きさがバラバラでしょう。

■フランスの国立印刷局は、ものすごく物持ちの良い所で、今はもう国立印刷局はありませんけど、博物館みたいな形でどこかに保管されています。これは一字一字彫ったものですので、同じ字でも形が変わります。

■これは、40ポイントを使って印刷した本です。『漢字西訳』と言って、漢字とフランス語とラテン語の対訳の辞書です。ナポレオンって大きな本が大好きみたいで、世界で最も大きな本が『エジプト誌』っていうエジプトの遺跡で発掘したものの図版があるのですけどそれは物凄く大きいです。１メートル以上あるのかな。なかなか目に触れることはないです。

■図をちょっと拡大してください。この本は、ピウス７世が帰りにイタリアのパルマというところの領主に、たぶんこの本を１冊渡したんだと思いますが、それが自分のお抱えの印刷人であるボドニ、ボドニっていうのはデザイナーが大好きな欧文書体ですけど、その書体を作ったイタリアの有名な活字彫刻家・印刷職人なんですけど、その人の所に１冊渡してこれと同じものを作ってみないかと、たぶん言ったのではないかと勝手に想像してるんです。ボドニも、じゃあやろうというんで、ボドニもなかなかやな奴といっちゃいけないけど、大胆な人で、さっきのフランスの『オラティオ・ドミニカ』は150言語だったんですけど、ボドニ版は151か154だったと思うんですけど、ほんのちょっと多いんです。つまりほんのわずかだけど、ナポレオンに勝った。イタリアとフランスは仲が悪いですから。

■でも残念なことに、「國」の右上の点が抜けている。フランスの見本帳を見ながらボドニは作ったんだと思います。非常に形が似ています。でも、フランスの方は「國」が転倒していますけどちゃんと点がついている。もしかしたらボドニはこの点をゴミだと思って落としたのかもしれない。このボドニの本も、なかなか見られないものです。

■今見てきたような本は『活字見本帳』といいますが、『活字見本帳』には２種類あります。そのメーカーが持っているすべての書体を出すもの、それが『総合見本帳』。もう一つはあるメーカーの特定の大きさ、８ポイントなら８ポイント、９ポイントなら９ポイントのすべての字を並べて見せているのが『総数見本帳』。見本帳にはこの２つがある。

■僕は、『総合見本帳』の中に漢字のものがないかなと思って色々調べていますが、なかなか外国の活字見本を手に入れるのが難しい。現在だったら凸版印刷の印刷博物館がある程度持っていますけど。他ではなかなか入手できないものを少しずつ集めて、調べてきました。（次号に続く）